

落葉前のイチヨウが黄色に色づいた札幌は、間もなく訪れるであろう北国の冬を迎える支度に忙しいそうだった。札幌の街を東西に貫く大通り公園には、冬の訪れを知らせる白く小さな「雪虫」が舞っている。ここ札幌を訪れるのは2年ぶりだった。前回は、救急医療学会北海道地方会での講演、メキシコから始まったブタインフルエンザが流行中のなかでの講演。今回は北海道国保診療施設連絡協議会での講演だった。

札幌は、大学を卒業した年に社会人としての一步を歩みだした街、私にとって医師としての原点のような街だ。今から二十数年前のこと。前年には中国で天安門事件が起き、ベルリンの壁が崩れ、



やまもと たろう
山本 太郎

幸せの理屈

インズの「おどるボンポコリン」が流れ、米米CLUBが歌う「浪漫飛行」やたまの「さよなら人類」が流行していた。日本がバブル経済の、最後の余韻に酔っていた時代だった。「坂の上の雲」に代表される明治の気概が持てはやされ、アジアで唯一先進国の仲間入りを果たした日本(人)の特殊性がやや誇らしげに語られたりした。

この年東西ドイツが再統一された。1ドルは1500円ほどで、公定歩合は年率6%。東証平均が一時2万円を切ったことが話題になったりしていた。街には、BBクイ

以来20年——。多くのことが変わった。どこことなく自信を失った日本人の姿を垣間見る。そんなとき内田樹氏の「日本辺境論」を読んだ。

氏は、丸山眞男のいう執拗(しつよう)低音(バツソ)・オステイナート(ト)を引用しつつ、日本人を、世界のどこかに中心を必要とする辺境の民と規定した。それが日本人だ。そうした視点からすれば、日露戦争を挟む明治時代は逆に特殊な時代だった、というのである。その上で氏は、「縮みゆく日本」で穏やかに生きるのも一つの選択だという。

これ以上幸せになると思えないとき、人は、今の生活を幸せだと答えるほかないのかもしれない。未来への諦めが、「幸せ」の理由だとしても、それが一つの選択たりえるのか、たりえないのか。そんなことを秋の夜長に考えた。(長崎大熱帯医学研究所教授)